

「ちの」 を 「編む」

2016年12月11日(日)

会場:モチヨリチカバ(茅野駅西口近く)

ゲスト

柿原優紀

Yuuki KAKIHARA

編集・アウトドアウェディング

たらくさ株式会社代表

1982年生まれ、大阪・神戸育ち。京都精華大学芸術学部卒業。いくつかの雑誌の編集、フリーランスを経て、編集事務所を設立し、日本の古き良き地域文化やくらしから学びを得たライフスタイルを提案する活動にシフト。2009年「Happy Outdoor Wedding」を立ち上げ、DIYの力を地域空間や資源に結びつける地域型の結婚式づくりを、東京を拠点に全国各地でおこなっている。

第1回

アイデアで地域資源にストーリーを

(ゲストトークより)

アウトドアウェディングは、新郎新婦の友人や周囲の人たちで、地域の資源を結び付ける地域型結婚式。編集者の視点から「結婚式」に興味を持った。「ウェディングって商品である前に文化だよね?」と。リサーチ・取材・執筆・発信…を小さく始め、反響が出てきた。できることを分担してやる「Do It Ourselves」。だれかの祝いごとを力を合わせてつくり、それを子どもたちが見て参加するのもいい。だれかのHOW TOをほかのだれかのHOW TOにつなげたい。必要なものは自分で持っていなくても街にある。それを組み合わせていけばいいのでは。人に出会う→地域の魅力を知る→地域の課題を知る。周りをよく見て資源を見つけ、折れないハートでダイブする。「これしかない」をおもしろがって「ここでしかできない」ことをする。そういう、地域資源の「編み直し」。光が当たってないものに光を当てる。アイデアで地域資源にストーリーをつくる。ないものはあるもので置き換える。見せ方はいろいろある。



文化の生まれる場

(参加者のクロストークより)

三浦 子どもたちの3人に1人が今ない仕事に就くと言われている。「すでにあるもの」を上手に編集して使っていく、つくっていくことが大切。

八木 冠婚葬祭は子どもの頃は自宅で行なってきた。地域は文化の生まれる場でもある。そういうことを見直すと新しい出会いが生まれると思う。

参加者 楽しくいる空間が好きで「モチヨリチカバ」をよく使っている。人となにかをやったり形にするのも好きだけど、一緒にいるという、それだけでまた次にやりたいことができる。

辻野 「場」があって「人」がいて、でも続けていくのが難しい。「人手」の部分、支える手がすごく大切。

柿原 予想通りのふるまい。粋、贅沢、教養。でもいつもそれはつまらない。奇をてらって新しいものにするストーリーは、そのときだけで文化ではない。いつもの登場人物が違う役割ってというのがすごくおもしろい。流行りをつくりたいのではなく、文化になっていけばと思ってやっている。

